

# 英国学校視察報告

八 島 等

## An Observational Report of a School Visit in the U.K.

Hitoshi Yashima

### はじめに

11月25、26日の両日、英国のロンドンにあるセント・マイケルズ・カトリック校 (St. Michael's Catholic College) を視察した。海外の学校視察は1994年に当時の文部省の派遣で訪問した、英国のランカシャーにあるモアカム・ハイスクール (Morecambe High School)、昨年度のフィンランドのヘルシンキにあるヘルシンキ大学附属学校であるヘルシンキ・リセウム普通校 (Helsinki Normal Lyceum) 及びビイキ教員養成学校 (Viikki Teacher Training School) に続き3回目である。昨年度と今年度は研究助成を受けての視察である。

### 目 的

今回の視察の目的は主に2つある。一つは、母語である英語を英国の中等学校ではどのように教えているのかという実情を調査し、日本の外国語としての英語教育との相違点を発見し、日本の英語教育の発展に寄与することである。もう一つは、大学時代に第二外国語としてフランス語を2年間学んだので、英国人にとっての外国語であるフランス語の授業を参観して、日本の外国語としての英語教育に応用可能な点を見出し、望ましい英語教育の在り方について考える一助とすることである。

### 訪問校が決定するまでの過程

今回の学校視察ができたのは、アーサー先生 (Mr. Arthur Rutson-Griffiths) から、ロンドン市議会教育局 (City of London council education department) に連絡を取るように勧められて連絡を取ると、教育局から、メールに学校のリストが見つかるリンクを貼り付けて送られてきたことによる。しかし、そのリストから、私の視察目的に適う20校近くの学校にメールを送ったものの、殆どの学校からは何の返信も

なく、ごく一部の学校から、期待に沿えない旨のメールがあった。

そこで、教育局に実情を話すと、候補校の膨大なリストを送っていただき、中等教育を行っている欄に数字が入っている学校に連絡をするように教えて戴いた。数字が入っている学校だけで6,440校あり、その中から3つの条件で候補校を絞った。すなわち、①ロンドンの近接地域の学校②男子校または男女共学校③18歳までの生徒がいる学校の3つである。①の理由は今回の視察は短期になるため、ロンドン郊外に行くことは時間的に不可能であった。②の理由は、ロンドンでは、2016年に1日に70人もの子供が誘拐されているという報告が児童慈善団体からあったそうである。さらに、外務省の海外安全ホームページによると、2022年度のイングランド及びウェールズにおける16歳未満の子供に対する誘拐事件が1,116件発生したということである。各学校ともセキュリティ対策を強化しており、外国人である私を受け入れてくれるのは、男子校または男女共学校であろうと考えた。③の理由は、日本と言う高等学校3年生までの教育をしている学校を視察したかったからである。

以上の3つの条件に合う学校を30校ほど抽出し、メールを送ったものの、前回同様、殆どの学校からは何の返信もなく、ごく一部の学校から、期待に沿えない旨のメールがあった。その中で一校だけ、興味を持って戴けた学校があり、7月にZoomによる会議を設定して戴き、9月第2週に訪問することを許可されたが、出発直前の木曜日に対応できなくなったというメールがきて訪問できなくなった。英国では、新学期が9月から始まり、教員も8月の終わりまで学校に出勤せず、9月になってからスケジュールが分かる。それにより、私が訪問する週に出張があり、学校にいないことがわかった。セキュリティ対策で、付添人がいないと校内に入れないため訪問が不可能ということであった。

やむを得ず、また、訪問校を探す作業を再開し、上記の3条件を満たす学校を30校ほど探し、メールを送ったものの、前回、前々回同様、殆どの学校からは何の返信もなく、ごく一部の学校から、期待に沿えない旨のメールがあった。その中で一校だけ、興味を持って戴けた学校があり、それが今回の訪問校である。訪問に当たり、セキュリティ対策として、私のパスポートと学長または学科長のサインがある私の身元保証書のコピーを送るよという依頼があった。身元保証書は今までに作成したことがなかったので、私の職歴の概要を書いて担当者にお送りすると、概ねそれでよいということであったので、もう少し改訂を加えて、アーサー先生に確認をしてもらったところ、もう少し具体的な数字が欲しいということと身元保証書のフォーマットを教えて戴いたので、書き直してもう一度送付すると、アーサー先生からこれ以上は何も言うことはないというお墨付きを戴いたので、学科長の宮崎先生にサインをして戴き、私のパスポートのコピーとサインをして戴いた身元保証書のコピーを担当者に航空郵便で送った。その後、担当者から、参観したい授業の

希望を聞くメールがあり、英語とフランス語の授業を参観したいと返信をすると、2日間のプログラムを組んだので、当日、朝8時30分に受付に来るようにというメールを戴き、今度こそ無事に視察ができることを確信した。

### 訪問校及び英国の教育制度の概要

セント・マイケルズ・カトリック校 (St. Michael's Catholic College) は、ロンドンのバーモンジー (Bermondsey) にあり、セヌ川に近い閑静な場所に位置する。11歳から18歳までの生徒が通う私立の共学のカトリックの中等学校である。様々な background を持った生徒が集まっているレベルの高い学校であると校長先生が自慢をされていた。“College” という「大学」というイメージがあるが、英国では、“college” はオックスフォード大学やケンブリッジ大学では「学寮」という意味で用いられる。また、訪問校のような私立中等学校の学校名としても用いられる。また、英国では、中等教育は11歳から18歳までを指す。義務教育は5歳から16歳までで、16歳で GCSE (General Certificate of Secondary Education) という一般中等教育修了証明試験を受ける。その後、2年間、第6学年 (sixth form) 課程に進み、A レベル試験に対応する教育を受け、大学への進学準備をする。第6学年が設置されていない学校の場合は、第6学年コレッジ (sixth form college) に進学して大学への進学準備をする。

訪問校の生徒数はおよそ1,000人である。そのため、昼食時間を2回に分けていた。一時限の授業は一時間である。1時限目と2時限目の間に休憩はなく、教師は数分早く終わって、生徒が次の教室に移動できるようにしていた。昼食が4時限目の後の日は、3時限目と4時限目の間にも休憩はない。昼食が3時限目の後の日は4時限目と5時限目の間に休憩がない。2時限目と3時限目の間には15分の休憩時間がある (付録)。一般的な日本の中等教育の授業は一時限50分であるので少し驚いた。また、11、12歳は日本では小学生であり、小学校は、一般的には一時限の授業は45分なので、普通に授業をこなしているのが驚きであった。しかし、一時間の授業が当たり前と思っている生徒も教師も十分にその時間を活用していた。

### 視察プログラムの内容の概要と視察当日の朝の様子

午前8時20分に、訪問校の受付に着くと、パスポートと学科長のサインがある私の身元保証書の原本の提示が求められ、係の人に手渡すと、モニター画面で、私の氏名、同行人数、面会希望者の名前の打ち込みと顔写真の撮影を求められた。すると、打ち込んだ内容と私の顔写真が打ち出されたペーパーをネームホルダーに貼って渡して下さり、4ページにも渡る訪問者の心得を読んで待つように依頼された。その心得を読んでいると、担当のダニエル先生 (Mr. Daniel Magnoff) が現れ、2

日間のタイムテーブルを渡してくださった。それによれば、1時限目は9時から始まり、一日5時限あり、2日で10回の授業参観をするようになっていた。その内容は、英国史1回、英語6回、フランス語3回の授業参観であった(付録)。ダニエル先生から、「2日間は本校の教員と同じスケジュールで動いて戴く」と言われ、8時30分から校門指導を行い、40分に校門を閉めた。生徒の登校風景を見てみると、仲間ととても楽しそうに登校して、ダニエル先生にも何人もの生徒が挨拶をしたり話しかけたりしていた。高等学校で34年教えていた経験から、登校する生徒の様子でその学校の生徒から見た良さがわかる。もちろん例外もあるが、往々にして、生徒が楽しそうに登校してくる学校は、生徒が学校に満足している学校と言える。また、私も校門指導をした経験が何度もあるのでよくわかっているが、生徒は校門に立っている教員に話しかけることはあまりない。挨拶をするにしても、お辞儀をする程度で、声に出して挨拶をする生徒は少ない。英国人の生徒の多くも同じで、ダニエル先生に話しかけたり挨拶をしたりはしなかったが、10名を超える生徒が挨拶をしたり話しかけたりしていたので、ダニエル先生が生徒に慕われていることがわかった。中には私に挨拶をしてくれる生徒もいて嬉しかった。

校門を閉めた後で、日本で言う朝のショートホームルームを行う教室に案内された。教室で担任の先生が、今週から来月にかけての行事予定をパワーポイントで示して生徒に確認させた。終わりに全員起立してお祈りをした。カトリック校なので、授業では、最初に全員起立をしてお祈りをしてから授業内容に入っていた。私自身、幼稚園と大学がカトリックであったので、クリスチャンではないが、何の違和感もなく一緒にお祈りができた。

### 実際の授業内容

実際に私が参観した授業内容を以下に科目ごとに私自身の感想と共にまとめる。  
英国史(25日1時限目)

12-13歳のクラスで、27名の生徒がいた。日本では、歴史の授業というのと、とかく年代を覚えることを奨励され、高校・大学入試でも、年代を問う問題が出題されるので、生徒は覚えなければならないと思いついでいるように思われる。しかし、この授業では、年代のことを問う質問は全くなかった。その代わりに、教師はビデオを見せる前に英西戦争が起こった背景を、ビデオを見せながら、やその戦争における両国の戦略の違い、その戦争による影響などを、それぞれ考えさせる問いを数多く発して、生徒はその問いに対して次々に手を挙げて答えていった。ビデオを見せた後で、生徒自身が今までに見聞きした内容との相違点について発表させていたが、その時も生徒は次々に手を挙げて答えていくという非常に活発な授業であった。日本でも最近増えている国際バカロレア認定校では、上記のような内容の授業が行

われている。やはり、国際基準の授業は、このような考えさせる授業が主流であることを再認識させられた。

### 英語

英語の授業は6回参観した。日本では、日本人が学ぶ日本語は国語（national language）と言い、外国人が学ぶ日本語は日本語（Japanese）と言うが、英国では（米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでも）、学ぶ対象者に関わらず英語（English）である。あくまでも推測の域を出ないが、自国の言語を国語（national language）と言い表す国は少ないのではないと思われる。

#### 英語（25日3時限目）

14-15歳のクラスで、25名の生徒がいた。Edwardian Britainの人生に関する文章を、3つの質問を提示した後で読ませ、読後に次々と挙手をした生徒を当てて答えさせた。その意見を集約した後、本文の内容に関する自分の意見を書かせ、その後でペアで言わせた。2人で言い合った意見を発表させ、教師がコメントを述べた。それから、パワーポイントで関連する別のパッセージを提示して、3つの質問を提示した後でそれを読ませた後、内容に関する意見のある生徒に手を挙げさせ、答えを集約してから、講評と教師自身の意見を述べて終わった。日本では、教師が文章の構成や文章の内容理解に必要なキーワードを説明したり、生徒に答えさせたりするように思われる。また、キーセンテンスを教師が提示して、その文の意味や、その文がその後の展開にどのように関わっているのかを問うことが多い気がするが、そのような細かなことを聞くことは一切なかったことが印象的であった。

#### 英語（25日4時限目）

15-16歳のクラスで、15名の生徒がいた。あるパッセージを読ませて、その中のキーワードを生徒に拾い出させ、その一つ一つの意味を考えさせ答えさせた。その後、そのパッセージを読んで学んだことを言わせ、それに対するコメント教師が述べて、そのコメントに対する意見をまた言わせた。それから、5つの考えてほしいことを提示した後で別のパッセージを読ませて、生徒と意見交換をして終了した。この授業では、日本の授業でよく見られるキーワードを答えさせる技法が使われており、何故か、こういう授業も展開するのかと少し安心をした自分がいた。しかし、それは始まりのごく一部で、授業の大半は生徒との意見交換であった。

#### 英語（25日5時限目）

17-18歳のクラスで、8名の生徒がいた。前々章で述べた第6学年（sixth form）課程のクラスである。国際英語についての態度というタイトルで話が始まり、それに関するやり取りを生徒と行った後でJennifer Jenkinsの指摘を読ませて、その主張に対する意見を言わせて、教師はそれを集約してまとめとした。さらに教師はも

う一人の学者の意見をパワーポイントで提示して、その意見に対する意見を言わせた。生徒は次々に挙手をして、教師が当てきれないほどであった。その後でエッセイライティングに移り、その書き方について、質問をしながら、生徒と話し合いをして望ましいエッセイライティングについて考えさせ、次回に生徒が実際に書いたものの講評をすると伝えて終了した。この授業でも、細かな点についての言及や質疑応答はなく、書かれている内容に対する意見を生徒に言わせる授業であった。

#### 英語（26日2時限目）

11-12歳のクラスで、19名の生徒がいた。事前に教師から創作（creative writing）の授業であると聞かされた。ファンタジーに関する創作をするためにまず、ファンタジーのジャンルでのよくある決まりごとについてリスト化させ、それを発表させた。その後で教師がまとめとコメントをしてファンタジーにおけるキーワードについての説明をした。それから、グループで上手いファンタジーにはどんな要素が含まれているかを考えさせ、発表させた。生徒から“plot”（筋）という意見が出て、教師が我が意を得たりと“plot”に関する説明をした。その後、パワーポイントであるファンタジーストーリーを提示し、なぜこのストーリーがよいファンタジーと言われているのかをグループで考えさせ、意見を発表させた。次回に実際に少し書いてみよう伝えて終了した。この授業でも、教師の説明は全体の10分の1程度で、授業の大半は生徒との意見交換であった。また、日本では小学6年生に当たる学年で創作活動の授業があるのが驚きであった。

#### 英語（26日3時限目）

17-18歳のクラスで、14名の生徒がいた。前々章で述べた第6学年（sixth form）課程のクラスである。パワーポイントで詩に関する批評を提示し、ペアでその意見にどの程度賛成かを考えさせ、それを発表させた。その後で、伝統的な詩の形式について意見を言わせ、その中で出てきたいくつかのキーワード（“lyric”（抒情詩）、“ode”（頌歌）、“sonnet”（ソネット）など）についてさらに生徒と意見交換をしながら議論を深めていった。その後、パワーポイントで1つずつ詩とそれに関連した質問を提示して、生徒にまずは個人個人で考えさせた後にペアで意見交換をさせて、その後で発表させた。その発表の中に出てきたキーワードをホワイトボードに書いて、それに関する質問を次々に発して、生徒はそれに答えて何人も挙手をして答え、教師がそれにコメントを加える形が続いて終わった。さすがに、第6学年の授業とあって、生徒の答えに単なる思い付きではなく論理に合ったものがいくつもあり感心した。教師も非常に満足そうな笑顔を浮かべていた。

#### 英語（26日4時限目）

12-13歳のクラスで、27名の生徒がいた。事前に教師からエッセイライティングの授業であると聞かされた。あるエッセイを読ませて、筆者の意図について生徒に

個々に考えさせ、挙手をさせて答えさせ、その答えをまとめて、その中のキーワードを説明した。その後、パワーポイントで別のエッセイとその内容に関する質問を提示してから、そのエッセイを読ませて、質問の解答をペアで考えさせ、教師が指名をして答えを言わせ、それに対するコメント教師が述べて、そのコメントに対する意見をまた言わせた。それから、次のエッセイをパワーポイントでその内容に関する質問を提示してから、そのエッセイを読ませて、個人個人で考えさせて挙手をさせて答えさせ、その答えをまとめて、その中のキーワードを説明した。それに対する質疑応答をして終了した。日本では中学1年生に当たる学年であるので、恐らく、エッセイとは何かという説明から入るのではと思っていたが、全くそのような説明はなく、実際にエッセイをいくつも読むことで、実践的に分らせるという技法に感心した。

### フランス語

フランス語の授業は3回参観した。目的のところで書いた通り、大学時代に2年間フランス語を学んだので、授業内容を理解できると思い参観させてもらうことにした。英国人にとってフランス語は外国語であるので、その教授法が日本における英語教授法に応用できるのではないかと考えた。3回の授業ともたまたま「未来時制」<sup>1</sup>であった。

#### フランス語（25日2時限目）

12-13歳のクラスで、20名の生徒がいた。教師は一時間全て英語で授業を行っていた。日本では、現在、すべての中学校・高等学校で原則英語で授業をするように学習指導要領で規定されているので、少し意外であった。内容は「未来時制」であった。まず、“travailler”（働く）の活用を生徒に言わせた後で、6つの形容詞を正しい形に直させて、それを英語に訳させた。次に、6つの中から2つを選んで、先程の“travailler”を使った文を作らせ発表させた。その後で、パワーポイントで絵を6枚提示して、CDから聞こえて来る文とのとマッチングをさせ、答え合わせ終了後に、6文を提示して訳させた。それから「未来時制」の活用の説明をパワーポイントで説明し、ペアで先程やった形容詞を用いた文を“Ce sera...”（これは・・・になるでしょう）に続けて言わせた。その間、英語で話した生徒を注意した。練習の成果を発表させた後、その6つの文に対する意見を書かせて終了した。日本でも、今回のような授業展開がまだ散見されるとの噂話も聞くが、訪問校のようなレベルの高い学校でも、教師が英語のみで授業を進めると無駄話をしてしまうのを目の当たりにして考えさせられた。

<sup>1</sup> 時制を単純現在と単純過去のみとする学説があるため、カッコ付きで表記する。以下同じ。

### フランス語（26日1時限目）

13-14歳のクラスで、19名の生徒がいた。最初に全員起立をしてフランス語でお祈りしてからフランス語の授業が始まった。昨日とは違い、今日の教師は英語とフランス語の両方で授業を進めていた。昨日と同様に「未来時制」の内容であった。まず、“travailler”（働く）の活用を生徒に言わせた後で、パワーポイントで提示した未来がどうなるのかということに関わる4文を英語に訳させ、それを発表させた。その後、4つの動詞の未来形を言わせて、その動詞を使って、私を主語にした4文を作らせ、それを発表させた。私も文法事項を導入した後で私を主語にした文を作らせるので共感した。それから、“Il y a...”（・・・がある）を用いた未来時制の4文を訳させ、それを発表させた。その後で、パワーポイントで6枚の写真と6つの形容詞を提示して、“Ce sera...”（これは・・・(になる)でしょう)に続く形容詞を考えさせ、指名して答えさせた。それから、パワーポイントで8枚の写真を提示して、CDで8文を聞かせてディクテーションをさせ、写真とのマッチングをさせ、指名して答えさせた。それから、教師がフランス語で「未来時制」の説明をして、理解の確認をした。最後に、未来はどうなるのかについての意見をフランス語で2、3文書かせて授業が終わった。この授業では、私語をする生徒は全くいなかった。やはり、適宜教師がフランス語を使っている姿を生徒に見せ、その後で生徒にもフランス語を使わせるという形が良い結果をもたらしているように感じた。

### フランス語（26日5時限目）

14-15歳のクラスで、17名の生徒がいた。教師は1時間全て英語で授業を行っていた。最初は復習ということで、過去形を用いた8つの文をパワーポイントで提示して、生徒に英語に訳させ答えさせた。次に、パワーポイントで8つの動詞を提示して、私が主語の場合、現在・過去・未来ではどうなるのかを生徒に言わせた。その後で、その8つの動詞を使って私を主語にした文をノートに書くように指示して、答え合わせをした。続いて、パワーポイントで8つの質問を提示して、それを英語に訳させた。その間、寝ている生徒がいて教師が注意したが、その生徒は何度も寝てしまったので、かなりきつく教師は注意していた。答え合わせをした後で、パワーポイントで質問を提示してから、あるパッセージのCDを2回流して、生徒にその質問に答えさせた。答え合わせをした後で、パワーポイントで聞いたパッセージを提示し、ペアで読ませ、そのパッセージを一文ずつ英語に訳させた。最後にパワーポイントで空所入りの8つの文を提示し、空所補充をさせて1分前に終了した。この授業が一番従来からある日本の中学校・高等学校の授業である文法訳読方式に近いと思った（現在でもまだ散見されるとの噂話も聞くが）。このような授業では、訪問校のようなレベルの高い生徒でも寝てしまうという事実を突きつけられた。



### 授業参観から得た示唆

10回の授業参観から、訪問校の教師はとにかく生徒に考えさせていたという感想を持った。ケースバイケースで、個々に、ペアで、グループでと、手を変え品を変えて、生徒に考えさせていた。そして、生徒はよく手を挙げて答えていた。日本の場合、質問をしても、たとえ、わかっていたり、意見があったりしていてもなかなか手を挙げない傾向がある（シンガポールの教員が私が訪問する2週間前に来ていて、同じことを言っていたそうである）。生徒に考えさせたり答えさせたりする技法を日本でももっと導入するのを感じた。それにより、生徒ももっと意見を言うようになるのではないかと思われる。

対照的に、フランス語の授業は古典的な技法が用いられているように感じた。動詞の活用や英訳・仏訳にかなりの時間を取っていた。そのため、パターン化した授業になり、中には面白くないと感じる生徒が出てしまったと思われる。教師は適宜言語をスイッチして、興味・関心を引かせ、生徒にも実際に外国語を使わせる機会を多く設ける必要があることを痛感した。

### 終わりに

今回、英国学校の視察という貴重な機会を得ることができて、大変嬉しく思った次第である。訪問校で面倒を見て戴いたダニエル先生だけではなく、休憩時間や昼食時に多くの教師が私に親しげに話しかけて戴き有難かった。校長先生は昼食時にわざわざ私のもとにやって来てくださり、いろいろとお話を伺うことができた。この貴重な経験を今後の英語教育に活かしていきたいと切に思う。

### 謝 辞

本視察は、令和2年度～令和6年度科学研究費（基盤研究（C）・課題番号：20K00881・研究代表者：八島等）の助成を受けて行われた研究の一部である。また、今回、視察校へ提出する身元保証書にサインをして戴いた本学科宮崎洋一学科長、科学研究費の事務全般でお世話になっている総合支援課中本佳代子係長、本視察に当たり、ご助言や身元保証書の英文のチェックでお世話になったアーサー・ラットソングリフィス先生に深く感謝申し上げる次第である。

### 引用文献

外務省海外安全ホームページ。「英国テロ・誘拐情報」。[https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcterror\\_154.html](https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcterror_154.html)（2024年5月25日閲覧）。

文部科学省。「中学校学習指導要領」。<https://www.mext.go.jp/content/20230120->

mxt\_kyoiku02-100002604\_02.pdf (2025年1月6日閲覧).

文部科学省. 「高等学校学習指導要領」. <https://www.mext.go.jp/content/20230120->

mxt\_kyoiku02-100002604\_03.pdf (2025年1月6日閲覧).

ParsToday. 「ロンドンで一日に70人の子供が誘拐」. <https://parstoday.ir/ja/news/world-i8347> (2024年5月25日閲覧).

## 付録

表

視察タイムテーブル

	11月25日 (月)	11月26日 (火)
登録時間	日本で言う朝の SHR	日本で言う朝の SHR
1時限目 9:00-10:00	英国史 (12-13歳)	フランス語 (13-14歳)
2時限目 10:00-11:00	フランス語 (12-13歳)	英語 (11-12歳)
休憩 11:00-11:15	休憩	休憩
3時限目 11:15-12:15	英語 (14-15歳)	英語 (17-18歳)
4時限目 a 12:15-13:15	英語 (15-16歳)	昼食
4時限目 b 13:15-14:15	昼食	英語 (12-13歳)
5時限目 14:15-15:15	英語 (17-18歳)	フランス語 (14-15歳)
登録時間	日本で言う帰りの SHR	日本で言う帰りの SHR